

全体の視座に立って個別の課題を

小野 満

1. はじめに一基礎研との出会い

私が、「働きつつ学び研究する」ということを意識したのは基礎研に出会って以後のことである。そのとき私はすでに45歳であった。中小企業に就職してすでに25年を経過していた。高校生の頃からマルクス経済学の基礎は学習していた。もちろん極めて不十分ではあったが、それでも私の企業生活は精神的には楽であった。なぜなら企業生活を客観的に眺めることができたからである。

1973年にオイルショックが起こった。毎日入荷する重油の値段が決まらない。月末に決まる値段に交渉の余地はない。このような事態をどのように考えたらいいのか。『資本論』の学習だけでは解けない。そこで探し回って出会ったのが基礎研であった。労働者は学習しなければならない。これはわかる。しかし労働者は研究もしなければならない。またその能力があるというのにはびっくりした。

2. 修了論文作成

とりあえず「資本論・帝国主義論講義」というのを1年間受けて、さらに1年後、大阪第3（金融流通協同組合論）学科が開かれるということで参加した。私は大学にも進学していないし研究者にもご縁がなかったので、大学教授という人に個人的にお目にかかったのはこの時の森岡孝二・中村雅秀先生がはじめてであった。ゼミナールという経験もはじめてであった。月2回の文献（古典と現代）の講読と討論。講義における質疑応答とは違ったものを感じた。

2年間で修了論文を書くということになっていた。自己の労働をテーマにするということでタイトルは「繊維独占による中小企業支配の実態」となった。中村先生の個別指導には緊張した。ちょうど会社で社長と一対一で対峙するのと同じように思えた。最初は何年かかってもいいと思っていたが、繰り返しのご指導を経て何とか論文を書き上げ2年間で無事修了することができた。

その後『経済科学通信』に論文や書評を掲載してもらうことができ、また編集していただいた諸先生方のご指導によって6冊の共著を出版することができた。大阪第3学科は現在まで続いていて、今年の7月26日で第863回になる。2003年には開講25周年の記念誌を出した。その時には開講50周年はとてものと思っていたが何とか続きそうだ。できれば記念ゼミには出席したいとひそかに狙っている。

3. 悲憤慷慨が出発点

労働者はどこから研究を始めるべきか。経済学の場合、自己の労働をテーマにするという

のは正しいだろう。中小企業の場合大企業による取奪というのがある。これは目の前にありわかりやすい。

たとえば金属加工で優秀な腕を持つ職人がいる。息子が居て跡を継ぐ意思もある。しかし機械を更新しては採算が合わない。いまの機械が動く間だけ働くという。これで良いのだろうか。この状態をどう考えるか。悲憤慷慨。これが出発点である。しかしそれだけでは研究にならない。

中小企業でもうまくやっているところはいくらでもある。それを学ぶべきだ。たしかにそれは当面一つの方法だがそれだけでは問題は解決しない。まず統計的に数値を明らかにして分析すべきである。近年中小の製造業は企業数が激減している。特に小規模の企業がそうである。それではすべての業種がそうかという増加している業種もある。サービス業である。そのなかでも介護・福祉である。それではここには問題はないのか。そんなことはない。やはり大企業（他業種も含めて）・諸制度からの取奪がある。冒頭に掲げたオイルショック当時の例は極端な例ではあるが、似たような事態は日常的に行われている。金融面でも天気の良いときに傘を貸すが雨が降ったら取り上げるというのはよくあることである。

このような事態をどう考えればいいのか。まず先行研究を学ぶことである。自分と異なる意見に学ぶことである。その場合、極端に違う意見（例えば採算の合わない中小企業は非効率であるから消滅すべきであるというような意見）と真剣に議論する必要はないが、自分と違う意見は異質な面にこだわるあまり全面的に否定しがちである。そうではなく、共通点はどこにあるか、相違点はどこか、それを冷静に議論したいものである。

議論をする場合、自由に議論できる友人をもつことが重要である。最初は相手の気分も配慮しなければならないが、回数を重ねるごとのお互いの気性もわかり自由に議論できるようになる。私の場合大阪第3学科をはじめ多くの研究会で自由に議論ができていた。それでも付き合いの浅い研究会では相手の意見を十分に聞くように心がけている。

よき指導者を得ることはさらに重要である。これはなかなか難しい。指導者がいないと議論が散漫になりやすく集約しない。私の場合基礎研に入所することによって、それ以前には考えられなかったような機会を得ることができた。感謝のほかはない。しかし私が入所した当時に比べるとその後の体制は弱体化していると思われる。最近はZoomの普及によって少しずつ変化が現れているがより一層の強化を望みたい。

私の研究も大阪第3学科での森岡先生のご指導が間接的になって以来やや停滞していたように思われる。2020年1月から十名直喜先生の働学研に参加するようになった。これが一つの飛躍になった。

4. 地域からか企業からか

今までの論文を整理して論文集にしたい。出版するというのではなくとりあえず自分の論文を秩序立ててまとめたい。そのような思いが募り、2019年ごろとりあえず着手するもうまくまとまらない。転機となったのが、働学研の月例会への参加である。働学研で、次々

に報告させていただいた。報告は10回、8万字に上る。これをぜひ体系化してほしい、との激励もいただいている。

私は中小企業問題の基本は地域との関係にあると考えている。地域と企業との関係はどうあるべきか。実は私は民主商工会関係の研究会にすでに10年以上参加している。しかしこの地域と企業との関係に対する感覚の溝が埋まらない。地域から企業を見るか企業から地域を見るか。民主商工会では地域から企業を見る。ところが私はどうしても企業から地域を見てしまう。企業の立場から生産や消費を考える。ここにまとめきれない根幹があるのではないかと考えるようになった。

私もずいぶん無駄な回り道を歩んできたようにも思う。時間を空費してきたようにも思う。しかし継続は力なりである。学問の道は長い。いつか完成するというものでもない。しかし学んできたものはいつかどこかで役に立つ。

5. 全体的な視座に立って個別の課題を

最近どのような視座に立って考えるかということが重要であると思いつく思うようになった。私の場合自己の労働を課題とすること、これは正しいと思っている。私はすでに労働の現場を離れて17年になる。しかし、中小企業での50年以上の経験は重い。ただし、それは個別の視座に立って個別の課題を研究することではない。あくまでも全体の視座に立って、日本資本主義、グローバル経済あるいは人類史的視座に立って自分の課題を研究しなければならない。それには広い視野にわたって情報を集めなければならない。いまは以前に比べて情報は豊富だ。豊富すぎるかもしれない。それを収集し分析するためにはしっかりした視座を確立する必要がある。

いま考えているのは、「生産力を制御する」という視座である。制御するというのはけっして抑制するという意味だけではない。抑制しなければならない面もあるが、発展させなければならない面もある。

それには生産とは何か、生産力とは何かを歴史的にさかのぼる必要がある。生産は本来生命生活を維持発展させる活動である。それが生産力を生産物に結実させる活動になり利潤率を向上させる活動になって、必ずしも生命生活の維持発展とは結びつかなくなった。核エネルギーを核兵器に利用して人類の殺害に使われる可能性が増大している。また廃棄物処理のできない安全性も確保できない原子力発電技術が利用されている。一方で利潤を生まないものは、生命生活の維持発展に貢献するものであっても生産されない。

これらをまとめて『生産力の「暴走」と制御—生命の再生産としての生産力の視座』と題して論文にまとめ、国際文化政策教育学会の機関誌『国際文化政策』に投稿し採用された。10年ぶりのことである。

この生産力をいかに制御するかという視座に立って、もう一度中小企業の問題を考えてみたいと思っている。